
レオリアの冒険者

山弘空也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レオリアの冒険者

【Nコード】

N8124Z

【作者名】

山弘空也

【あらすじ】

東と西の大陸に2分された世界フォルミット。この世界の東の大陸、イール大陸中央に位置する冒険者の国、レオリア王国の冒険者学校に入学したハルトとアルス。

まだまだ冒険者見習いな彼らが、冒険者学校で知り合った仲間と繰り広げる、冒険の物語。

プロローグ（前書き）

初めての小説投稿となります。

誤字脱字、意見、指摘等々ありましたらよろしくお願いします。

ブローグ

両手で持った剣を構えながら、茂みの奥を睨みつける。

ここで気を抜くわけにはいかない。気を抜いたら、負けるのは自分だ。気を抜いて戦えるほど、簡単な相手ではないし、驕ってもいいない。

そう頭に叩き込みながら、いつでも動けるように、地面を踏みしめ、腹に力を入れる。

街から出てすぐに広がっている森の中。ここはいつも、鍛練をしに訪れる修行の場だった。まだまだ見習いの己にとって、ここは戦場だった。

隙を見せないよう、小さく息をついた瞬間、茂みの中から相手が飛び出してきた。逆立った毛並みに、鋭い牙をもち、大きく開いた口。全長1mほどの、四本足で立つ獣がそこにいた。トムウルフと呼ばれる、街の近くで良く見られる魔獣の一種だ。

茂みから飛び出し、まっすぐにこちらの喉元を狙ってくるトムウルフの攻撃を横にずれることで避け、すかさず斬りかかろうとするが、素早さは向こうのほうが上だ。あと少し、というところで避けられ、体毛を少し切り取っただけに終わる。

距離をとり、やや腰を低くしながら、いつでも動けるように構える。相手の方が速い、といっても、目で追えない速さではない。次に近づく時、今度こそ仕留めようと、トムウルフの動きを感じ取るうとする。

トムウルフの方は、こちらを睨みつけ、獰猛な口からは唸り声が響いていた。先ほどの一撃で、仕留められなかったのが余程いらついたのだろうか。今にも飛びかかろうとしている。

そんな両者の間に、風が吹き、木々が揺れ、木の葉のざわざわとした音になる。

その瞬間、トムウルフが駆けだした。先ほどのように、喉元を狙

い、飛び上がった。

この一撃を避けて、こちらから攻撃を仕掛けなければならないが、さっきと同じように動いては、おそらくまた避けられる。ならば……と、剣を構えたまま、より腰を落とし、こちらから前進する。飛び上がったトムウルフの懷に潜り込み、そのまま敵の腹を袈裟がけに斬りつける。

自重により、降ってくるトムウルフの身体と、手に持った剣がぶつかりあい、トムウルフの腹に剣が食い込んでいく。

確かな手ごたえを感じながら、剣を振りぬぎ、そのまま前に進んで、トムウルフの腹から漏れ出す血を避ける。

腹を切られ、地面に落下したトムウルフは、そのままピクリとも動かなかった。

それを確認して、ようやく安心して、肩の力を抜き、剣を下して、息をついた。

その時だった。

横の茂みから、突如もう一匹トムウルフが飛び出し、喉元めがけて襲ってきた。

「しまっ……！」

完全に油断していた。目の前の敵が倒れたからといって、周りを警戒せずに、気を抜いてしまうなんて、命取り以外の何者でもない。咄嗟に、剣を持っていない方の左腕を、頭の前に持つてくるが、身につけているのは、普段着の上に、申し訳程度の革の防具だけだ。トムウルフの牙の前には、対して意味をなさないだろう。

一撃を喰らってしまうのを覚悟し、それでも被害を最小限にとどめようと、後ろに下がりながら、身構える。が、

「アイスボルト！」

幼いながらも、凜とした声が聞こえたかと思うと、声のした方から、氷の弾丸がいくつか飛んできた。

それらは全て、襲いかかってきたトムウルフへと向かい、被弾した時の衝撃で、敵は吹っ飛ばされてしまった。

吹っ飛ばされた後のトムウルフを見れば、氷の弾丸が当たったと思しきところは、白く凍りつき、口からは少量の血を出して、横たわっていた。

それを確認してから、声のした方へと目を向けると、そこには、明るい茶色の髪を短く切りそろえ、鍛えているのだろっ、きちんと着込んだシャツから見える体つきは、筋肉質ではなく、年相応ながらもしっかりしている、多少幼い顔立ちの少年がいた。その胸元にはシンプルな青いクリスタルのついたペンダントを下げていた。

「兄さん、もうちょっと気をつけないとだめだよ。」

「悪い悪い、つい油断しちゃった。」

そう言つて、彼に近づくと、彼は少々困った様子を見せながら笑いかけた。

「まあ、それはいいんだけど。兄さん、そろそろ家に帰らないと、式に遅れちゃうよ。」

「何っ！もうそんな時間になってたのか！まずい、急いで戻らないと母さんの飯食う暇がない！急いで帰るぞ！」

彼の一言に、思っていたよりも、時間が経ってしまったことに気づき、あわてて剣についた血を拭って、鞘におさめると、そのまま走りだした。

今日は、これからの人生にとって大事な日なのだ。遅れるわけにはいかない。それに、母さんのご飯を食べ損なうと、後で文句を言われてしまう。文句を言われるのは嫌だし、何より自分自身、母さんのご飯は大好きなのだから、食べないという選択はない。

「あ、ちよっと待ってよ兄さん！もー、せっかく呼びに来てあげたのに！」

後ろから、少年の避難めいた、されどどこか楽しそうな声がとんできていた。

後ろの彼も、自分と同じくらいには足が速い。これは、家まで競争

かな、と考えながら家を目指して走った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8124z/>

レオリアの冒険者

2011年12月25日22時53分発行